



TITLE:

<雑録> カブール通信

AUTHOR(S):

岩村, 忍

---

CITATION:

岩村, 忍. <雑録> カブール通信. 東洋史研究 1954, 13(1-2): 154-154

ISSUE DATE:

1954-04-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/138991>

RIGHT:

るまで。

第二は、本書に出てくる「中國革命の思想」の主体にない手が、どうもインテリ層や思想家たちであるということ。こうした人々が中國の近代化に果たした役割は、決して小さく評價出来ない。が、「思想」というものが「人間が生きたために不可欠のもの」とするならば、革命的エネルギーをもち行動した農民や労働者たちの思想乃至意識こそ、「中國革命の思想」として究明すべきではなかったろうか。このような人々が封建的植民地的意識のなかからいかに脱却し、いかに變革されて、新しい思想にめざめていったのか、そしてその思想をいかに自分たちの生活のなかにまでとこしこんでいったのか、生活に根をおろしていった思想こそ、眞に新中國のイデオロギー的支柱となつてゐるのではないか。封建的殘滓なお濃い日本という場において考えるとき、私は、民衆の生活の中から民衆の思想が照らし出されてないことを限りなく惜しいと思う。これがまた全体の迫力の弱さ、感銘の乏しさに關連してゆくのではなからうか。

なお、抗日戦前夜に、封建文化のなから民族の生存にすこしで

も利益になるものを攝取して武器とし、一切の舊文化批判の基準を民族の生存に有益か有害かの一點において展開した思想運動、及び學問の大衆化の問題。クラスで成績のわるい生徒をどうするか。何によつて人間の價值評定をするかの問題。等々、書かなければならぬことは多いが、こゝではすべて割愛しよう。たゞ最後に、著者たちはこの共同研究を通じて、「これからは學者たちのナグサミのための學問はやるまい、日本の革命の主力である労働者が、それを血肉にすることのできる學問を志そう」と考えるようになったといわれているが、まことに貴重な体験といわねばならない。たとえ、この書が著者たちの意圖を十分に發揮し得ぬものであり、わたくしたちが物足りなさを感じたとしても、こうした貴重な体験のにじみ出た本書を読まれる人々が、これを通じて日本の學界の封建性と、學問の在り方について、きびしい自己批判が生れるならば、それだけでも日本の學問にとつて大きな前進といえよう。著者が期待されるように、本書を出発點としてよりすぐれた思想史・革命史が書かれるよう、私もまた期待しよう。

(横田 滋)

### (カーブル通信 岩村忍氏より田村實造氏宛)

無事カーブルに到着、四月中旬奥地に出發のため準備中です。ハザラ蒙古人問題など仲々面白いことが多く、大いに楽しんでおります。私の宿のボーイもハザラ人です。當地(アフガニスタン全体)ではペルシャ語が共通語なので、目下毎日會話を勉強しています。ペシャワールでは、附近で發見されたウイグル蒙古文字の碑を見ましたが、拓本をとる用意がなく、残念でした。またパンジャップ大學では同大學の Mohammed Shaf 教授が編纂したラシード・エッディーンの書翰集を入手しました。四月中旬奥地に入り、五月下旬カーブルに歸り、再び七月一ばい旅行し、八月中旬には歸國のつもりであります。

三月三十日